

『論語集注』(朱熹撰)の日本語訳(學而第一)
——『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈——

Japanese translation of “Lunyu Jizhu”(1)
--Xi ZHU’s Interpretation of “Confucian Analects”--

孫 路易
Luyi SUN

岡山大学全学教育・学生支援機構
教育研究紀要
第2号 2017年12月

『論語集注』（朱熹撰）の日本語訳（學而第一）

——『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈——

孫 路易

Japanese translation of “Lunyu Jizhu” (1)

—Xi ZHU’ s Interpretation of “Confucian Analects” —

Luyi SUN

概要

周知の通り、朱熹（一一三〇～一二〇〇。朱子は尊称）の『論語』解釈は、中国思想の発展に寄与しただけではなく、日本や朝鮮半島などの東アジアの思想の発展にも大きな影響を与えたものである。だが、『論語』には「道」「心」「徳」「君子」などの中国哲学の概念が随所に現れており、朱子哲学においてのそれらの概念の含意を明確に解明しない限り、朱子の『論語』解釈の全内容を理解することは極めて難しいと思われるのである。

筆者は、長年に渡って朱子哲学の研究に力を注ぎ、いままでは既に、
「朱子の「太極」と「気」（岡山大学『大学教育研究紀要』第七号、二〇一一年）
「朱子の「神」（岡山大学『大学教育研究紀要』第八号、二〇一二年）
「朱子の「心」（京都大学『中國思想史研究』第三十四號、二〇一三年）
「朱子の「理」（岡山大学『大学教育研究紀要』第十号、二〇一四年）
「朱子の「情」（岡山大学『大学教育研究紀要』第十一号、二〇一五年）
「朱子の「変化気質」（『岡山大学大学院社会文化学科研究科紀要』第四三号、二〇一七年）
「朱子の「君子」（『岡山大学大学院社会文化学科研究科紀要』第四四号、二〇一七年）
などの論文を発表した。その朱子哲学の研究を通じて、筆者は、上記の諸論文、及び『四書章句集注』（新編諸子集成、中華書局、一九八三年）と『朱子語類』（全八冊、宋・黎靖徳編、王星賢点校、一九九四年）、特に『朱子語類』に所収の「論語（一～三十二）」（巻第十九～五十）に基づいての、『論語集注』を主とする朱子の『論語』解釈の現代日本語の完全翻訳を作成することが必要だと強く思うようになったのである。

本稿では、『論語集注』（前掲の『四書章句集注』に所収）の「學而第一」の朱子の集注を和訳することと、『論語』學而第一の原文を主に『朱子語類』（前掲）に所収の「論語（一～三十二）」に記録されている朱子の説明に基づいて和訳することを試みる。

キーワード：理，道，徳，性，敬，君子。（これらの概念の内容は本稿末尾に付録）

學而第一

これは書の最初の篇、だから内容には「根本を務める」に関するものが多い。つまり、儒

学の入門、徳を積むことの基本だから、学ぶ者の最初に務めるものである。全部で十六章。

此為書之首篇、故所記多務本之意。乃入道之門、積徳之基、學者之先務也。凡十六章。

第一章

子曰、學而時習之、不亦說乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不愠、不亦君子乎。

孔子は言われた。「学ぶ（つまり、未知のことを知ろうとすること、または身にない能力を身に備えようとする）こと、そしてよく習う（つまり、学んだものをもう一度学ぶ、または学んだことを実行する）ことは、喜ぶことではないか。友達が遠いところから（自分を）訪ねて来たことは、楽しいことではないか。（自分のことを）知らない人に対して怒り（つまり、ほんの少しの不平、または個人的な怨み）を抱かない者は、また君子（つまり仁義礼智の徳の実行を行う人）ではないか。」

「説」は、「悦」（喜ぶ）と同じ。「學」（学ぶ）という語の意味はつまり「效」（真似する）である。人間の性（仁義礼智の理であるが、つまり道德の徳目、及び視聽言動などの身体に固有する様々な機能・能力）はみな善であるが、道理を知ることには先と後があり、後覚の人は必ず先覚の人の行為を真似して、はじめて善を明らかにして最初（の状態、つまり善）に回復することができるのである。「習」（習う）は、鳥が何回も飛ぶことである。学ぶことがやまないことは、鳥が何回も飛ぶようなものである。「説」（えつ）は、喜ぶ気持ちである。既に学びそしてよく練習するならば、学習内容に習熟して、心の中は喜び、その前進することは当然やまないのである（例えば、習字とか）。程子（つまり兄の程顥と弟の程頤のことである。この二人のことを「二程」と言うが、二人の学説はほぼ同じな為、「程子曰」という形で引用されることが多い）は言った。「『習』は、重ねて習うことである。時には繰り返し考えたずね、（道理が心の）中に深く浸み込むと、喜ぶのだ。」また言った。「学ぶ者は、その学んだことを行動に移すのだ。よく習うならば、学んだものは自分の身につくのだ。だから喜ぶのだ。」謝氏（謝良佐、字は頤道。二程の弟子であり、「上蔡先生」と称される）は言った。「『時習之』（時に習う）とは、習わない時はない、ということである。『坐すること尸の如き』（『礼記』曲礼上に「若夫坐如尸、立如齊」とある）は、坐る時も習うのであり、『立つこと齊の如き』は、立つ時も習うのである。」

「樂」は、「洛」（らく）と発音する。「朋」は、同類のことである。遠いところから来たのであれば、近いところの者はいうまでもないのである。程子は言った。「善を人に及ぼすと、信じて従う人が多い。だから楽しいのだ。」また言った。「喜ぶことは心にあるものであるが、楽しいことは主に外に現れるものである。」

「愠」は、「紆」「問」の反（つまり、「紆」の頭子音と「問」の韻母との組み合わせの音

節で発音する)。「愠」は、怒りの気持ちを抱くことである。君子は、徳の実行を行う人の呼び名である。尹氏（尹焞、字は彦明。程頤の弟子）は言った。「学ぶことは自分自身のことであり、(他人が自分のことを)知っているか否かは他人の勝手であるから、どうして怒ることがあるのだろうか。」程子は言った。「(善を)他人に及ぼすことを喜んでするが、その効果が現れなくても落ち込んだりはしない。これこそ君子と言えるのだ。」わたくしは思うには、「(善を)他人に及ぼしてそこで喜ぶ」は当然のことであり簡単だが、「(他人が自分のことを)知らなくても怒らない」は(道理に)逆らうことであって難しいことである。だからただ徳の実行を行う人しかできないことだ。しかし、徳の実行を行い得るのはまた、学びが正しく、習いが習熟し、喜びが深く、そして(これらのことが)ずっと続くのに限るのである。程子は言った。「楽しい気持ちは喜ぶ気持ちがあつてその後に現れるものであり、楽しい気持ちがなかったならば(その人のことを)君子と言えないのだ。」

説、悦同。○學之為言效也。人性皆善、而覺有先後、後覺者必效先覺之所為、乃可以明善而復其初也。習、鳥數飛也。學之不已、如鳥數飛也。説、喜意也。既學而又時時習之、則所學者熟、而中心喜説、其進自不能已矣。程子曰、習、重習也。時復思繹、浹洽於中、則説也。又曰、學者、將以行之也。時習之、則所學者在我、故説。謝氏曰、時習者、無時而不習。坐如尸、坐時習也。立如齊、立時習也。

樂、音洛。○朋、同類也。自遠方來、則近者可知。程子曰、以善及人、而信從者衆、故可樂。又曰、説在心、樂主發散在外。

愠、紆問反。○愠、含怒意。君子、成徳之名。尹氏曰、學在己、知不知在人、何愠之有。程子曰、雖樂於及人、不見是而無悶、乃所謂君子。愚謂及人而樂者順而易、不知而不愠者逆而難、故惟成徳者能之。然徳之所以成、亦曰學之正、習之熟、説之深、而不已焉耳。○程子曰、樂由説而後得、非樂不足以語君子。

第二章

有子曰、其為人也孝弟、而好犯上者、鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也。君子務本、本立而道生。孝弟也者、其為仁之本與。

有子は言った。「その人柄は、孝(父母を親愛すること)、悌(兄を敬愛すること)を行っていながら、位の高い人に対して逆らう気持ちを抱く者は少ない。位の高い人に対して逆らう気持ちを抱くことをしない者が悖り逆らい争い闘うことを起こす、ということはいままで起こったことはない。君子は根本の事を務める(つまり力を集中すること)。根本の事をしっかり務めれば道(つまり仁義礼智の理)が自然と現れるのである。孝、悌、これはまさに仁(ここでは、つまり愛)を行う根本の事ではないか。」

(「有子」は敬称である。「有子」という言い方について、『論語』は有子、曾子の弟子

が整理しまとめた書物であり、だから、この書では孔子のほかに、ただ有子と曾子の二人だけを「子」で敬称したのだ」と、程子は説明している。）

「弟」、「好」はみな去声（第四声）である。「鮮」は上声（第三声）、以下同じ。有子は孔子の弟子で、名は若。よく父母に仕えることは孝（つまり恭しく親愛すること）であり、よく兄に仕えることは悌（つまり真心を持って敬愛すること）である。「犯上」とは、位の高い人を犯す（少し逆らう気持ちがあれば犯すという）ことである。「鮮」は、「少ない」である。「作乱」は、つまり悖り逆らい争い闘うことである。これは、人もしよく孝・悌を行うことができれば、その心は温和で素直、位の高い人を犯すことを好むことは滅多にないし、ましてや「作乱」を好むはずがない、ということである。

「與」は、平声（ここは陽平で、つまり第二声）である。「務」は、力を集中することである。「本」は、「根」のようなものである。「仁」とは、愛の理で、心の徳である。「為仁」は、「仁を行う」ことである。「與」とは、疑問の言葉であり、謙虚で敢えて直言しないことである。その意味は、君子はどんな事をする時も専ら根本（のところ）に力を入れるのであり、根本がしっかりしていれば、その道（つまり仁義礼智の理）が自然に現れるのだ、ということである。前文に言う孝、悌は、つまり「仁を行う」根本であり、学ぶ者がこれを務めれば、仁の道（つまり仁の徳）がそこから自然に現れるのである。程子は言った。

「孝、悌は、従順の徳であり、だから位の高い人を犯すことを好まない。どうしてまた理（つまり仁義礼智の徳）に背いて綱常（つまり道德）を乱すことがあるだろうか。徳には根本があり、根本がしっかりしていればその道（つまり仁義礼智の理）は充実で広々となる（つまり十分に現れるということ）。孝、悌が家で行われ、それから仁愛は他人に及ぼし、これがつまり、『親を親しみて民を仁にす』（『孟子』尽心上）ということである。だから仁を行うことは孝、悌を根本とする。性において言えば、仁は孝、悌の根本である、ということになる。」ある人が（程子に）尋ねた。「孝、悌は仁の根本である。これは孝、悌から出発して仁まで到達できるということですか。」（程子は）答えた。「そういうことではない。仁を行うことは孝、悌から始めるのであり、孝、悌は仁に属するものである。仁を行う根本だと言うなら問題がないが、仁の根本だと言ってはいけないのだ。そもそも、仁は性であり、孝、悌は用（つまり仁の具体的な現れ）であり、性にはただ仁、義、礼、智の四つがあるのみで、どうしてまた孝、悌なんかあるだろうか。しかし仁は愛を主とし、愛は父母を愛するより大きなものはない。だから『孝、悌、これはまさに仁（ここでは、つまり愛）を行う根本の事ではないか』というのだ。」

弟、好、皆去聲。鮮、上聲。下同。○有子、孔子弟子、名若。善事父母為孝、善事兄長為弟。犯上、謂干犯在上之人。鮮、少也。作亂、則為悖逆爭鬪之事矣。此言人能孝弟、則其心和順、少好犯上、必不好作亂也。

與、平聲。○務、專力也。本、猶根也。仁者、愛之理、心之德也。為仁、猶曰行仁。與者、疑辭、謙退不敢質言也。言君子凡事專用力於根本、根本既立、則其道自生。若上文所謂孝弟、乃是為仁之本、學者務此、則仁道自此而生也。○程子曰、孝弟、順德也。故不好犯上、豈復有逆理亂常之事。德有本、本立則其道充大。孝弟行於家、而後仁愛及於物、所謂親親而仁民也。故為仁以孝弟為本。論性、則以仁為孝弟之本。或問、孝弟為仁之本、此是由孝弟可以至仁否。曰、非也。謂行仁自孝弟始、孝弟是仁之一事。謂之行仁之本則可、謂是仁之本則不可。蓋仁是性也、孝弟是用也、性中只有箇仁義禮智四者而已、曷嘗有孝弟來。然仁主於愛、愛莫大於愛親、故曰孝弟也者、其為仁之本與。

第三章

子曰、巧言令色、鮮矣仁。

孔子は言われた。「表面だけを美しく飾っている言葉を並べ、人に見せかけるような顔色をする人には、仁の徳が少ない（つまり絶対がない）のだ。」

「巧」は、「好」（つまり良い）である。「令」は、「善」（つまり良い）である。その言葉を良くし（「花言巧語」、つまり中身のない言葉を並ぶこと）、その顔色を良くし（「色厲而内荏」など、つまり見せかけの顔色をすること）、外面を飾ることをもって、人を喜ばせようと務めれば、人欲（つまり理に背くこと）を恣にすることであって本心の徳が失われる（つまり仁の徳が人欲に蔽われてほんの少しも現れ得ない）のである。聖人の言葉使いは穏やかで柔らかいから、「鮮」（少ない）と言うことは、つまり「絶対がない」という意味だ。学ぶ者は、ぜひとも深く戒めなければならない。程子は言った。「『巧言令色』は仁ではない、ということをつかれば、仁とは何かを知るのである。」

巧。好。令、善也。好其言、善其色、致飾於外、務以悅人、則人欲肆而本心之徳亡矣。聖人辭不迫切、專言鮮、則絶無可知、學者所當深戒也。○程子曰、知巧言令色之非仁、則知仁矣。

第四章

曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎。

曾子は言った。「私は（自身にまだ欠点がある為に）毎日（特に）三つのことを自省する。人の為に利害を斟酌するには心を尽くしていないのではないか、友達との交際においては不誠実（つまり事の処理が理に適っていない）だったのではないか、師から学んだことを習熟していないのではないか（或は自分がまだ習熟していない事を人に教えたのではない

か)。」

「省」は、「悉」「井」の反。「為」は、去声（第四声）である。「傳」は、平声（ここでは陽平で、第二声）である。曾子は、孔子の弟子で、名は参、字は子輿。自分の心を尽くすことは「忠」と言い、誠実のことは「信」と言う。「傳」は、師から学んだことを言う。「習」は、自分が習熟することである。曾子は、この三つのことをもって自省し、「不忠」「不信」「不習」があればそれを改め、なければ一層励むのである。彼は自ら（身を）治めることがこのように誠実で切実であり、学ぶことの根本を得ていたと言えるのである。しかし、三つのことの順序は、また「忠」と「信」を「伝」と「習」の根本とするのである。伊氏（前出）は言った。「曾子は理に従うことを守る。だから行動すると必ず自分に反省を求めるのである。」謝氏（前出）は言った。「諸子（多くの学者や学派）の学は、すべて聖人から出たものであるが、その後、時代が下れば下るほどその真意がますます失われていたのである。ただ曾子の学だけが、専ら心を内面に使っていた。だからそれを伝えても弊害はない。（このことは）『子思子』『孟子』を読めば分かるのだ。残念なのは、彼の善なる行為や良い言葉は悉く世に伝わっているのではないということだ。その幸いに残っていて散失していないもの（に対して）は、学ぶ者は心を尽くさなくてよいだろうか。」

省、悉井反。為、去聲。傳、平聲。○曾子、孔子弟子、名參、字子輿。盡己之謂忠。以實之謂信。傳、謂受之於師。習、謂熟之於己。曾子以此三者日省其身、有則改之、無則加勉、其自治誠切如此、可謂得為學之本矣。而三者之序、則又以忠信為傳習之本也。○尹氏曰、曾子守約、故動必求諸身。謝氏曰、諸子之學、皆出於聖人、其後愈遠而愈失其真。獨曾子之學、專用心於內、故傳之無弊、觀於子思孟子可見矣。惜乎、其嘉言善行、不盡傳於世也。其幸存而未泯者、學者其可不盡心乎。

第五章

子曰、道千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時。

孔子は言われた。「諸侯がその国を治めるには、事に当たる時は深淵に臨み薄氷を踏むような気持で慎んで行うことで民から信用を得ること、財を節約することでそれを民に使うようにすること、土木事業などの為に民を動員するには農繁期を避けること、という五つの根本のことを努めるのだ。」

「道」、「乗」は、みな去声（第四声）である。「道」は、治めることである。馬氏（馬融、七九年～一一六年、字は季長、後漢の学者）は言った。「八百軒の家から一台の兵車を出す。」
「千乗」は、諸侯の国のことであり、その地域では兵車を千台出せるのである。「敬」とは、

「主一無適」つまり事に当たる時は深淵に臨み薄氷を踏むような気持で臨み、軽視や傲慢な態度を絶対にとらないということである。「事を敬して信」とは、その事に慎んで当たることで民から信用を得ることである。「時」は、農閑期のことである。これは、国を治めるポイントはこの五つのことであり、（これも）また根本を務める、という意味である。程子は言った。「この言葉の意味は極めて浅い（つまり深遠なものではない）だが、しかし当時の諸侯はほんとにその通りに実行すれば、また十分その国を治めたのである。聖人の言葉は極めて身近なものであるが、君主にも諸侯にもみな通用するものである。この三つの言葉は、その至極まで推せば、堯や舜の治国もこれに過ぎることはない。もし普通の人の言葉は身近なものならば、ただの浅くて近いだけのものである。」陽氏（陽時、字は中立、号は龜山先生、程子の弟子）は言った。「君主は、慎まなければ民は怠り、信用がなければ民は疑う。民が怠るしかも疑うならば、どんな事も行えないのだ。事を慎重に行って信用を得るのは、身（を治めること）が先である。『易』（節卦）には『節して以て度を制すれば、財を傷（やぶ）らず民を害せず』とある。思うに、贅沢に使えば財が損なわれ、財が損なわれれば必ず民を害することになる。だから民を愛するならば必ず先ず節約をしなければならない。しかし民を使うのにその適切な時期にしなければ、根本を努める人は力を尽くし得ないから、人を愛する心があっても、人々はその恩沢を受けられないのだ。しかし、これはただその所存について論じただけであって、施政には及んでいない。だが、もしこの心（つまり所存）がなければ、（仁政の）政策があっても、実施することはできないのだ。」胡氏（胡寅、一〇九八～一一五六、字は明仲、致堂先生と称される）は言った。「この数条は、またみな敬を主とする。」私が思うには、（この）五つのことは往復して（敬→信、信→節用、節用→愛民、愛民→使民以時、または使民以時→愛民、愛民→節用、節用→信、信→敬）互いに関連するもので、各々順序があり、読者は細かく吟味するのがよからう。

道、乗、皆去聲。○道、治也。馬氏云、八百家出車一乘。千乘、諸侯之國、其地可出兵車千乘者也。敬者、主一無適之謂。敬事而信者、敬其事而信於民也。時、謂農隙之時。言治國之要、在此五者、亦務本之意也。○程子曰、此言至淺、然當時諸侯果能此、亦足以治其國矣。聖人言雖至近、上下皆通。此三言者、若推其極、堯舜之治亦不過此。若常人之言近、則淺近而已矣。楊氏曰、上不敬則下慢、不信則下疑、下慢而疑、事不立矣。敬事而信、以身先之也。易曰、節以制度、不傷財、不害民。蓋侈用則傷財、傷財必至於害民、故愛民必先於節用。然使之不以其時、則力本者不獲自盡、雖有愛人之心、而人不被其澤矣。然此特論其所存而已、未及為政也。苟無是心、則雖有政、不行焉。胡氏曰、凡此數者、又皆以敬為主。愚謂五者反復相因、各有次第、讀者宜細推之。

第六章

子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆、而親仁。行有餘力、則以學文。

孔子は言われた、「年少の生徒は、家では父母を親愛し、外では自分より年長の者を敬愛し、行いは本分を守り中身の無い言葉を言わず、人々に迷惑をかけず、仁者（仁の徳を実行する人）に親しんで事の本末と是非を教えてもらう、そういうことを務めるのだ。暇な時は、『詩』や『書』などの六芸の文（つまり『礼』『楽』『書』『詩』『射』『御（御車）』の諸書）を学ぶことに使うのだ。」

「弟子」の弟は、上声（第三声）である。「則弟」の弟は、去声（第四声）である。「謹」とは、行いは本分を守ることである。「信」とは、言葉に中身があることである。「汎」は、「広い」である。「衆」は、「大衆」である。「親」は、近づく（つまり親しむ）ことである。「仁」は、仁者（仁の徳を実行する人）を指す。「餘力」は、暇な時を言う。「以」は、使うことである。「文」は、詩や書の六芸の文（つまり『礼』『楽』『書』『詩』『射』『御』の諸書）を指す。程子（前出）は言った。「弟子という務めを務める者は、暇な時に文を学ぶのである。その務め（つまり五つの事）を務めないで先に文を学ぶのは、自分自身の為の学びではないのだ（つまり人に見せかける為の学びである）。」伊氏（前出）は言った。「徳の実行は根本であり、文や芸は末節である。その本と末を明らかにし、先後関係を知れば、徳の実行を行うことができるのだ。」洪氏（洪興祖、一〇九〇～一一五五、字は慶善、号は練塘）は言った。「暇な時ではないのに文を学ぶと、文がその質（素朴さ）を滅ぼし、暇な時には文を学ばなければ、質が勝って浅はかである。」私が思うに、暇な時には文を学ばなければ、聖人や賢人の作った規則を考証することができないし、事の当然の理を認識することもできなくて、その行為はもしかしたら私意（つまり理に背くこと）から出たものとなり、ただ浅はかだけの話ではないのだ。

弟子之弟、上聲。則弟之弟、去聲。○謹者、行之有常也。信者、言之有實也。汎、廣也。衆、謂衆人。親、近也。仁、謂仁者。餘力、猶言暇日。以、用也。文、謂詩書六藝之文。○程子曰、為弟子之職、力有餘則學文、不修其職而先文、非為己之學也。尹氏曰、德行、本也。文藝、末也。窮其本末、知所先後、可以入德矣。洪氏曰、未有餘力而學文、則文滅其質。有餘力而不學文、則質勝而野。愚謂力行而不學文、則無以考聖賢之成法、識事理之當然、而所行或出於私意、非但失之於野而已。

第七章

子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交言而有信。雖曰未學、吾必謂之學矣。

子夏は言った。「優れている人を尊んでそこで美人が好きの如く徳を好むように心を変え、

父母に仕える時はその力を尽くし、君主に仕える時はその身を委ね(つまり自分の為のもくろみはしない)、友達との交際においては中身の無い言葉を言わない、そういう人は、たとえまだ学んでいないと人は言うとしても、私は必ず既に学んだのだと思うのだ。」

子夏は、孔子の弟子で、姓は卜、名は商。優れている人を尊んで、そこで美人が好きな如く徳を好むようにその心を変えることは、善なる者を好んでそこで誠実を尽くすことである。「致」は、「委ねる」と同じ。「その身を委ねる」とは、その自身を意識しないことである。四つのことはみな人倫における大事なものであって、これを実行する時は必ず誠を尽くし、学ぶのも求めるのもただこのようになるとうするだけである。だから、子夏は、「このように実行できる者がいるのであれば、(その人は)生まれながらの素質が優れているのでなければ、きっとそれは学問を励んだことによって(そのような人)になれたに違いない。まだ学んでいないと思う者もいるが、しかし私は必ず既に学んだのだと思うのだ」と言ったのである。遊氏(遊酢、一〇五三～一一二三、字は定夫、号は広平)は言った。「三代(夏、殷、周)の学は、いずれも人倫を明らかにするためのものである。この四つのことが実行できれば、人倫を重んじていることである。学問の目的は、これ以外のものはない。子夏は、文学がよくできることで有名であり、彼がこのように言うのであれば、古代の人々の言う学というものは(どういうものなのかを)知ることができるのだ。だから『学而』の一篇は、だいたいどれも根本を務めることについての話である。」呉氏(呉棫、一一〇〇～一一五四、字は才老)は言った。「子夏の言葉は、その意図は悪くない。しかし語調は勢いが行き過ぎたのであり、その流れの弊害としては、もしかすると学問を廃することになってしまうかもしれない。必ず前章(つまり第六章)の孔子の言葉のようであって、はじめて弊害がないのだ。」

子夏、孔子弟子、姓卜、名商。賢人之賢、而易其好色之心、好善有誠也。致、猶委也。委致其身、謂不有其身也。四者皆人倫之大者、而行之必盡其誠、學求如是而已。故子夏言有能如是之人、苟非生質之美、必其務學之至。雖或以為未嘗為學、我必謂之已學也。○遊氏曰、三代之學、皆所以明人倫也。能是四者、則於人倫厚矣。學之為道、何以加此。子夏以文學名、而其言如此、則古人之所謂學者可知矣。故學而一篇、大抵皆在於務本。呉氏曰、子夏之言、其意善矣。然辭氣之間、抑揚太過、其流之弊、將或至於廢學。必若上章夫子之言、然後為無弊也。

第八章

子曰、君子不重則不威、學則不固。主忠信。無友不如己者。過則勿憚改。

孔子は言われた。「君子(徳の実行を行う人)は、(言葉は簡単で重みがあり物腰は穏やか

であるような) 重厚感がなければ威厳がないだけでなく、学んだものもまた堅固ではないのだ。忠(つまり、心が誠意を尽くすこと)と信(つまり、行いに偽りがなく、理に従っての行いを行うこと)を最も重要なこととする。人との交際においてはわざわざ自分より劣っている者を求めてそれと友達になることはしてはいけないのだ(つまり、ためになることを求めて自分より優れている人だけと友達になるのではあるが、自分に及ばない者も拒まず、ただ親しくはしない)。過ちを犯した時はすぐに改め、ぐずぐずしてはいけないのだ。」

「重」は、重厚のことである。「威」は、威厳のことである。「固」は、堅固のことである。外面が軽薄な人は、必ず内面を堅くすることはできない。だから、重厚感がなければ威厳がなく、その学んだものもまた堅固ではないのだ。

人は、「忠」(つまり、心が誠意を尽くすこと)、「信」(つまり、行いに偽りがなく、理に従っての行いを行うこと)でなければ、(そのやる)事はみな実質がなく、悪事を働くことにはなりやすく、善事を行うことは難しいのだ。だから、学ぶ者は必ずこれ(つまり「忠」「信」)を最も重要なこととするのだ。程子は言った。「人としての道はただ忠信だけであり、誠意がなければ何物も存在しないのだ(つまり、視聴言動が事物の理に従ってのものでなければ事物の存在が無視されたことになり、事物にとっての善事は行い得ないのだ)。ましてや感情が出たり感覚が入ったりすることは一瞬も止まらず、その寄り所がないものは人の心である(『孟子』告子上「出入無時、莫知其郷。惟心之謂與。))。もし忠信がなければ、どうしてまた物があるだろうか。」

「無」は、「毋」に通じ、禁止の言葉である。友の善を取り入れて仁の徳をより十分に実行し得るのであり(『論語』顔淵「君子以文會友、以友輔仁。」、(友が)自分に及ばなければ、プラスになることがなくてマイナスになるのだ。

「勿」も、また禁止の言葉である。「憚」は、困難を恐れることである。自分で自分の身を治めるに勇気がなければ、悪が日に日に大きくなる。だから、過ちがあれば当然速やかに改めるべきであり、困難を恐れて目先の安逸を求めてはいけないのだ。程子(前出)は言った。「学問の目的はほかでもなく、ただその不善を知れば、速やかに改めて善に従うというこの一事に尽きるのだ。」程子(前出)は言った。「君子の、身を修める方法は、まさにこのようなことだ。」游子(前出)は言った。「君子のあり方は、威厳があって重厚感があることを本質とし、それを、学ぶことを通して達成するのである。学問のあり方は、必ず忠信を最も重要なこととし、そして自分より優れている人と友達になって(その不足の部分)を補うのである。しかし或いは過ちを改めるに全力を注ぐことができなければ、結局は徳の実行が行い得ず、それで自分より優れている友もまた必ず気持ちよく善を為す方法を教えてくれるとは限らない。だから、最後に「過ちを犯した時はすぐに改め、ぐずぐずしてはいけないのだ」と言ったのだ。」

重、厚重。威、威嚴。固、堅固也。輕乎外者、必不能堅乎内、故不厚重則無威嚴、而所學亦不堅固也。

人不忠信、則事皆無實、為惡則易、為善則難、故學者必以是為主焉。程子曰、人道惟在忠信、不誠則無物。且出入無時、莫知其鄉者、人心也。若無忠信、豈復有物乎。

無、毋通、禁止辭也。友所以輔仁、不如己、則無益而有損。

勿、亦禁止之辭。憚、畏難也。自治不勇、則惡日長、故有過則當速改、不可畏難而苟安也。程子曰、學問之道無他也、知其不善、則速改以從善而已。○程子曰、君子自修之道當如是也。游氏曰、君子之道、以威重為質、而學以成之。學之道、必以忠信為主、而以勝己者輔之。然或吝於改過、則終無以入德、而賢者亦未必樂告以善道、故以過勿憚改終焉。

第九章

曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣。

曾子は言った。「(地位の高い人が) 喪(死者の別れ去ることを悲しむ礼儀。つまり葬儀)の時にはその礼儀を尽くし、祭り(遠い昔の先祖を追想する儀式。つまり祭祀)の時にはその誠意を尽くすのであれば、一般の庶民はそれに感化されてその徳もまた一層篤実なものになるのだ。」

「慎終」とは、喪(死者の別れ去ることを悲しむ礼儀。つまり葬儀)の時にその礼儀を尽くすことである。「追遠」とは、祭り(遠い昔の先祖を追想する儀式。つまり祭祀)の時にその誠意を尽くすことである。「民德歸厚」とは、一般の庶民はそれに感化されて、その徳もまた篤実なものになる、ということである。思うに、「終」は、人のうっかりしてしまいがちなものだが、それを謹むことができ、「遠」は、人の忘れやすいものだが、それを追懐することができる、(これは)「厚」(つまり、着衣のことで言えば、あたかも、今のままでは既に暖かいが、もう一枚服を着る、というようなこと)のあり方であり、だから、「慎終」と「追遠」を自らが行えば、自身の徳が厚く(つまり篤実に)なるのであり、一般の庶民はそれに感化されれば、庶民の徳もまた厚い(つまり篤実な)ものになるのだ。

慎終者、喪盡其禮。追遠者、祭盡其誠。民德歸厚、謂下民化之、其德亦歸於厚。蓋終者、人之所易忽也、而能謹之。遠者、人之所易忘也、而能追之。厚之道也。故以此自為、則己之德厚、下民化之、則其德亦歸於厚也。

第十章

子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政、求之與、抑與之與。子貢曰、夫子溫、良、

恭、儉、讓以得之。夫子之求之也、其諸異乎人之求之與。

子禽は子貢に尋ねた。「孔子はある国に着かれると、必ずその国の君主にその国の政治について意見を聞かれるのだが、それを自分からお求めになったのだろうか、それとも向こうから持ち掛けられたのだろうか。」子貢は答えた。「孔子は温（つまり温和で穏やか）、良（つまり善良で陰険狡猾な心がない）、恭（つまり厳粛で慎重）、儉（つまり節度があり控え目）、讓（つまり謙遜）、そういう人柄のお方で、そこで持ち掛けられたのだ。孔子の求め方は、他の人の求め方とは違うのだ。」

「之與」の與は、平声（ここでは第二声）、以下同じ。子禽は、姓は陳、名は亢。子貢は、姓は端木、名は賜。二人とも孔子の弟子である。「亢は子貢の弟子」と言う人もいるが、どちらが正しいかは分からない。「抑」（そもそも）は、反語の言葉である。

「温」は、穏やかで温和なことである。「良」は、善良で陰険な心がないことである。「恭」は、慎重で敬うことである。「儉」は、控え目で節度があることである。「讓」は、謙遜である。（この）五つは、孔子の優れた立派な徳が光輝いて人を引き付けるものである。「其諸」は、語気という言葉である。「人」は、「他の人（孔子以外の人）」のことである。その意味は、孔子は求めたことがないが、孔子の徳や容貌はこのような立派なもので、だから、当時の君主たちが尊敬し信用して、自分から自国の政治のことについて（孔子に）諮問したのであり、他の人は必ず君主に求めてそれから諮問されるというような形のものではない、ということである。聖人の、その行く先の所々で人々を感化し神聖を示すことの神妙さは、まだまだ簡単に測り知られるものではないが、しかしこれによって見れば、その徳が優れてその礼儀が敬重で外に求めようとはしないことも、また知ることはできるのだ。学ぶ者は、まさに専念して（これを）学ぶことを励むべきである。謝氏（前出）は言った。「学ぶ者は聖人の威厳がある礼儀作法を見て、徳を一層篤実なものにするのだ。子貢のような人も、また聖人をよく観察した人であり、また徳の行いをよく語ることができた人である。今は聖人の在世から千五百年をも経っているが、この五つから孔子の姿形を想像すれば、いまもなお人を奮起させることができるのだから、ましてや孔子本人に教を仰いだ弟子はいうまでもなからう。」張敬夫（名は栻、字は敬夫、一一三三～一一八〇、号は南軒）は言った。「孔子はその国に着くと必ずその国の政治のことについて君主に意見を聞かれるのだが、孔子に国を任せて政治を預けることができる君主は一人もいなかった。思うに、聖人の礼儀作法を見て政治のことを積極的に告げたいと思うその気持ちはうまれながら備わる徳を好む良心から出るものであるが、しかし私欲（つまり理に背く意念）がその良心を損ない、そこで終に任用することはできなかつた、ただそれだけのことなのだ。」

之與之與、平聲、下同。○子禽、姓陳、名亢。子貢、姓端木、名賜。皆孔子弟子。或曰、

亢、子貢弟子。未知孰是。抑、反語辭。

溫、和厚也。良、易直也。恭、莊敬也。儉、節制也。讓、謙遜也。五者、夫子之盛德光輝接於人者也。其諸、語辭也。人、他人也。言夫子未嘗求之、但其德容如是、故時君敬信、自以其政就而問之耳、非若他人必求之而後得也。聖人過化存神之妙、未易窺測、然即此而觀、則其德盛禮恭而不願乎外、亦可見矣。學者所當潛心而勉學也。○謝氏曰、學者觀於聖人威儀之間、亦可以進德矣。若子貢亦可謂善觀聖人矣、亦可謂善言德行矣。今去聖人千五百年、以此五者想見其形容、尚能使人興起、而況於親炙之者乎。張敬夫曰、夫子至是邦必聞其政、而未有能委國而授之以政者。蓋見聖人之儀刑而樂告之者、秉彝好德之良心也、而私欲害之、是以終不能用耳。

第十一章

子曰、父在、觀其志。父没、觀其行。三年無改於父之道、可謂孝矣。

孔子は言われた。「父が在世の時には、その子供の志を観察するのだ（つまり、父は賢人（才能があり善を行う人）であるため、その子供は不肖者（才能がなく悪を行う人）であっても、悪を行えないが、その子供の志（つまり悪を行おうとする心）を分かるし、父は不肖者であるため、その子供は賢人であっても、その父に善を行わせることはできなくて、時にはやむを得ず父に従ってしまうのだが、その子供の志（善を行おうとする心）も分かる、ということ）。父が没世の後には、その子供の行いを見るのだ（つまり、父が生前に行っていた事は理に適うものであれば、改めないのであるが、父が生前に行っていた事には理に背くところがあれば、当然それを改めるのである）。（一般的に言えば、父が生前に行っていた事には大した過ちがなければ、つまり理に背いて人に害を与えるようなところがあれば、その父親への親愛を表す為に、つまり父の小さな過ちが人に大きく取り上げられることを避ける為に、）三年を過ぎてからその父の行っていた事を改めるのであれば、親孝行と言うべきだ。」

「行」は、去声（第四声）である。父が在世の時は、その子供は独断で行動することはできないが、その志（つまり善を好むかそれとも悪を好むか）は知ることができる。父が没世の後には、（その子供の）それからの行動（つまり父の生前に行っていた事をすぐに改めるかどうか）は見ることができる。だからそれ（つまりその志と行動）を見ればその子供の人柄が善かそれとも悪かを十分に分かる。しかし更に必ず三年の間に父の生前に行っていた事を改めないことができるのであれば、はじめてその孝が認められるのだ。そうでなければ、その行為が善であっても、それが孝だとすることはできない。尹氏（前出）は言った。「もしその父の生前に行っていた事は理に適うものであれば、生涯（それを）改めなくてもよい。もしその父の生前に行っていた事は理に背くものならば、どうして（それを改

めるのに) 三年も待たなければならないのであろうか。だが、三年を過ぎても改めないのは、孝子に忍びない心があるからだ。」游氏(前出)は言った。「『三年の間は改めない』もまた、改めたほうがいいのではあるが(いますぐに)改めなくてもいい、こういう事に限ってのこと、という意味である。」

行、去聲。○父在、子不得自專、而志則可知。父没、然後其行可見。故觀此足以知其人之善惡。然又必能三年無改於父之道、乃見其孝、不然、則所行雖善、亦不得為孝矣。○尹氏曰、如其道、雖終身無改可也。如其非道、何待三年。然則三年無改者、孝子之心有所不忍故也。游氏曰、三年無改、亦謂在所當改而可以未改者耳。

第十二章

有子曰、禮之用、和為貴。先王之道斯為美、小大由之。有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也。

有子は言った。「礼の役割は、人と人との間を和睦させることを目的とするものである(つまり、礼は即ち和であり、厳格の中で理に従うことにより心が落ち着くということである。礼は非常に厳格なもののように見えるが、実際、礼は自然から出たものであって、一節も人に強要するものはないし、人の心が落ち着くところのものである。人々は必ずこの道理を分かって、そこで自然に和睦するのだ。これはあたかも、少しの灯心の燃え滓が手に落ちると、痛いと言うのであるが、灸治療の時には痛いとは思わない、というようなものである)。先王(堯、舜、禹、湯、文王、武王、周公)の政道はこれこそ(つまり、人々の間の和睦を実現したことそこ)立派なものであり、事の大小を問わずみな礼に合致していたのである。それでもまたうまく行かないことがあって、和睦の為の和睦は(この句には何か欠けていて前句との繋がりが不自然である。つまり、和睦の為の和睦は、礼を離れていて自然なものではないため、無節制に流れ易い。だから)、礼でそれを節制しなければ、それもまたうまく行かないのだ。」

「礼」とは、天理の節文(理に従っての節度がある立ち居振る舞い)であり、人々が事を行う時の儀式や規則である。「和」とは、「落ち着いた余裕のある様子」という意味である。思うに、礼の根本は厳格ではあるが、みな自然の理から出たものであり、だから、その現れは必ず落ち着いた余裕のある自然体であって、はじめて貴いとすることができるのだ。先王(堯舜や夏、殷、周の三代の王たち)の政道は、これにより称賛されたのであり、その大きな事も小さな事もこれによらないものはない。

「有所不行、知和而和、不以礼節之、亦不可行也」は、前文を受けて言うものである。それなのにまたうまく行かないのは、ただ和が貴いだと知ってひたすらに和を求めて、更

に礼でそれを節制しなければ、(それも)また理の本来に復歸するものではないのであって、そこでさすらって(理の本来に)復歸することを忘れて、(そこで)またうまく行かないのだ。程子は言った。「礼が勝てば離れる(『礼記』樂記「樂勝則流、禮勝則離」。ここでは、つまり礼義作法が度を過ぎると理に背く)。だから礼の役割は人々を和睦させることを目的とするものだ。先王の政道は、これにより称賛されたのであり、その大きな事も小さな事もこれによるのだった。樂が勝てば流れる(ここでは、つまり音楽が度を過ぎると無節制に流れやすい)。だからうまく行かない場合があり、和睦の為の和睦は、礼でそれを節制しなければ、それもまたうまく行かないのだ。」范氏(名は祖禹、字は淳夫。程子の弟子)は言った。「だいたい礼の根本は敬(ここでは、つまり和)を主とするものであり、その役割は人々を和睦させることを目的とするものである。敬は、礼の成り立つそのより所である。和は、樂(つまり音楽)の生ずるそのよるところである。有子は、礼と樂の根本をよく知っている人と言えるのだ。」私が思うには、厳格でありながら落ち着きがあり、和睦でありながら節度があり、これは理の自然であって、礼のすべてである。僅かのズレがあれば、その偏りのない正しさを失って、それぞれその一方の偏りに従う(つまり理に背く)のである。そのうまく行かないことはだいたい、こういうものである。

禮者、天理之節文、人事之儀則也。和者、從容不迫之意。蓋禮之為體雖嚴、而皆出於自然之理、故其為用、必從容而不迫、乃為可貴。先王之道、此其所以為美、而小事大事無不由之也。

承上文而言、如此而復有所不行者、以其徒知和之為貴而一於和、不復以禮節之、則亦非復理之本然矣、所以流蕩忘反、而亦不可行也。○程子曰、禮勝則離、故禮之用和為貴。先王之道以斯為美、而小大由之。樂勝則流、故有所不行者、知和而和、不以禮節之、亦不可行。范氏曰、凡禮之體主於敬、而其用則以和為貴。敬者、禮之所以立也。和者、樂之所由生也。若有子可謂達禮樂之本矣。愚謂嚴而泰、和而節、此理之自然、禮之全體也。毫釐有差、則失其中正、而各倚於一偏、其不可行均矣。

第十三章

有子曰、信近於義、言可復也。恭近於禮、遠恥辱也。因不失其親、亦可宗也。

有子は言った。「言葉での約束は、義(ここでは、つまり事柄のほどよいこと)に合致するかどうか(つまりその約束を果たせるかどうかとか)を考え、義に合致すれば人と交わしてよいのだ。後に必ずその言葉通りの行動を履行することができるのだから。恭敬の気持ちを表す時には礼(ここでは、つまりその相手の人の身分やその場などに応じての礼義作法)に合致するのであれば、侮辱されることはない。偶然にある人へ身を寄せる時には最初から謹むべきであり、その人は賢者であって親しむことができるのであれば、その人を

自分の将来の宗主（ここでは、つまり、例えば、ある人の推薦により自分がある官職についていた場合、その推薦者は即ち自分の宗主、こういうような人）と思ってもよいのだ。」

「近」「遠」は、ともに去声（第四声）である。「信」は、言葉で固く約束することである。「義」とは、事柄のほどよいことである。「復」は、言葉通りの行動を履行することである。「恭」は、恭敬の気持ちを表すことである。「礼」は、節文（つまり理によつての節度がある立ち居振る舞い）である。「因」は、「依る」のような意味である。「宗」は、「主」のような意味である。その意味は、言葉で固く約束した事は果たせるものであれば、その言葉通りの行動は必ず履行することができるのであり、恭敬の気持ちを表すにはその節に当たれば（つまりその立ち居振る舞いは適切で行き過ぎもなく不足もなければ）、辱めを避けることができるのであり、頼るところの人は親しむことができる者であれば、その人を自分の将来の宗主（ここでは、つまり、例えば、ある人の推薦により自分がある官職についていた場合、その推薦者は即ち自分の宗主、こういうような人）とすることもできる、ということである。これは、自分の言行や人との交際は当然その最初（の接し方）を謹んでその終わり（の終わり方）を考慮すべきであり、さもなければ、ぐずぐずしてそのまま続けている間に、その自失を後悔してならないということになるのだ、という意味である。

近、遠、皆去聲。○信、約信也。義者、事之宜也。復、踐言也。恭、致敬也。禮、節文也。因、猶依也。宗、猶主也。言約信而合其宜、則言必可踐矣。致恭而中其節、則能遠恥辱矣。所依者不失其可親之人、則亦可以宗而主之矣。此言人之言行交際、皆當謹之於始而慮其所終、不然、則因仍苟且之間、將有不勝其自失之悔者矣。

第十四章

子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也已。

孔子は言われた。「君子は（心に常に重要なもの、つまり理があつて、食事のことや住処のことに対しては関心がないから、）食事は腹いっぱい食べることを求めず、住処は快適な住まいを求めず、（「言うは易く行いは難し」、だから、）そのまだよくできないことをできるように努力し（または行うべき事は必ず十分に行うこと）、言葉に余裕を持たせ（または言葉を慎んで余計なことを言わないこと）、自分より事物の当然の理をよく知っている人について（つまり、例えば師事するとか）その日頃の修練（つまり学習など）を修正していただくのであり、本当に学ぶことが好きな人だと言うべきだ。」

「好」は、去声（第四声）である。安楽な住居や満腹の食事を求めないとは、志を抱いてそれを考える暇がないことである。「敏於事」とは、そのまだよくできないことをできるよ

うに努力することである。「慎於言」とは、言葉に余裕を持たせることである。そしてまだ独善することを恐れて、必ず有道の人(つまり自分より事物の理をよく知っている人)について(例えば、師事するとか)、その不十分なところを正してもらうのであれば、学ぶことが好きだと言えるのである。だいたい道とは皆、事物の当然の理(仁義礼智、つまり道德の徳目及び事物の固有属性としての機能・能力)であり、人々の共通のよところのもの(つまり行為の準則や事物の扱い方や物の使い方)を指すのである。尹氏(前出)は言った。「君子の学びでは、この四つを実行することができれば、志を篤くし(徳の)実行を励む人だと言うべきだ。しかし有道の人に正してもらわなければ、誤りがあることを免れないのであり、例えば楊・墨(つまり楊朱と墨子。前者は利己を主張、後者は兼愛を主張)の、仁義を学ぶに誤りがあるようなものである。その学の流れは君主をも父をも軽視するとまで主張するようになったのであり、こういう人を学ぶことが好きな人だと言っていいだろうか。」

好、去聲。○不求安飽者、志有在而不暇及也。敏於事者、勉其所不足。慎於言者、不敢盡其所有餘也。然猶不敢自是、而必就有道之人、以正其是非、則可謂好學矣。凡言道者、皆謂事物當然之理、人之所共由者也。○尹氏曰、君子之學、能是四者、可謂篤志力行者矣。然不取正於有道、未免有差、如楊墨學仁義而差者也、其流至於無父無君、謂之好學可乎。

第十五章

子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而樂、富而好禮者也。子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨。其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言詩已矣。告諸往而知來者。

子貢は尋ねた。「(貧しい人は卑屈になり易いが、)貧しくても卑屈ではなく、(金持ちの人は傲慢になり易いが、)金持ちであっても傲慢ではない、こういう人はいかがですか。」孔子は答えられた。「結構だ。しかし、貧しくても楽しみ(つまり、その貧乏を忘れて人格を高めるための日頃の修練を楽しむこと)、金持ちであっても礼を好む(つまり、その裕福を忘れて理に従って事を行い、贅沢をしないこと)、こういう人には及ばないのだ。」子貢は尋ねた。「『詩経』には、切(切る)が如く磋(みがく)が如く、琢(彫る)が如く磨(研ぐ)が如し(つまり、骨や角と宝石や玉は切・磋という加工工程と琢・磨という加工工程を経て精巧な芸術品に仕上げられる)、とあります。それはこのことを言っているのですか(つまり、切磋琢磨することによりどんな事もみな立派に成し遂げられるのであり、人もその日頃の修練により人格を高められる、という意味ですか)。」孔子は答えられた。「賜(子貢の名前)よ。はじめて君と詩の話をするができるようになったなあ(つまり、詩句に対照して言えば、「切」と「琢」は「諂(卑屈)でないこと」と「驕(傲慢)でないこと」であり、「磋」と「磨」は「楽しむこと」と「礼を好むこと」であり、「切」と「琢」がな

ければ「磋」と「磨」の施しはできないのと同じように、「諂（卑屈）でないこと」と「驕（傲慢）でないこと」がなければ「楽しむこと」と「礼を好むこと」もできない、そういう詩の含意を子貢は分かるようになった）。過去のことを教えると将来のことを分かるのだ（つまり、子貢は「貧」と「富」のことを話し合ったことによって、それ以外のまだ言っていないことまでも「みな切磋琢磨するべきだ」という理解に到達したのだ）。

「樂」は、「洛」と発音する。「好」は、去声（第四声）である。「諂」は、卑屈のことである。「驕」は、傲慢のことである。一般の人は、貧しいか金持ちかに溺れて、自分を見失って、そこで必ず（この）二つの欠点があるのだ。「諂」（卑屈）でもなく「驕」（傲慢）でもなければ、自分を見失わないことを知っているということになるが、貧富の域を超越することがまだできていないのだ。だいたい「可」とは、僅かに「結構」のことであってまだ充分ではない、という意味の言葉である。楽しむならば「心広くして体ゆたか」（『大学章句』伝之六章「心廣體胖」。つまり、心身ともに健やか）でその貧困を忘れるのであり、礼を好むならば善を行うに落ち着き、理に従うことを楽しんで、そこでその裕福を忘れるのである。子貢は金儲けが上手で有名であり、思うに、最初は貧しかったが後は金持ちになり、しかし自分を見失わないように努力していたのであり、だから、このことを尋ねたのだ。そうして、孔子がこのように答えたのは、思うに、その既によくできた部分をほめて、そのまだ達していない境地に達するように励んだのである。

「磋」は、「七」「多」の反。「與」は、平声（ここでは第二声）である。「詩」は、『詩経』衛風「淇澳」の篇であり、その意味は、骨や角を加工する人は削ってからすり磨き、玉や宝石を加工する人は彫ってから研ぐのであり、それは、加工は既に精緻であるが、もっともっとその精緻さを求めていく、ということである。子貢は、自分では「諂」（卑屈）でもなく「驕」（傲慢）でもないことを最高の状態だと思ったのだが、孔子の言葉を聞いて、道理の無窮（つまり、切磋琢磨してもっともっと人格を高めていくべきこと）を知り、自分を見失うことはなかったけれども、まだまだ満足することはできないと思い、そこで、この詩句を引用して確かめたのである。

「往」とは、その既に言ったものである。「来」とは、そのまだ言っていないものである。私が思うには、この章の問答は、その話の浅深と高低（つまり高遠な話か浅薄な話か）はもとより説明するまでもなく明白である。しかし「切」らなければ「磋」（みがくこと）を施すことができないし、「琢」（彫）らなければ「磨」（研ぐこと）を施すこともできないのだ。だから、学ぶ者は、小さな成果に満足して、道理の極致を求めない、こういうことをしてはいけないけれども、また虚しい高遠な目標を追い求めて、自分自身に切なる確かな欠点を察しない、こういうことをもしてはいけないのだ。

樂、音洛。好、去聲。○諂、卑屈也。驕、矜肆也。常人溺於貧富之中、而不知所以自守、

故必有二者之病。無諂無驕、則知自守矣、而未能超乎貧富之外也。凡曰可者、僅可而有所未盡之辭也。樂則心廣體胖而忘其貧、好禮則安處善、樂循理、亦不自知其富矣。子貢貨殖、蓋先貧後富、而嘗用力於自守者、故以此為問。而夫子答之如此、蓋許其所已能、而勉其所未至也。

磋、七多反。與、平聲。○詩、衛風淇澳之篇。言治骨角者、既切之而復磋之。治玉石者、既琢之而復磨之。治之已精、而益求其精也。子貢自以無諂無驕為至矣、聞夫子之言、又知義理之無窮、雖有得焉、而未可遽自足也、故引是詩以明之。

往者、其所已言者。來者、其所未言者。○愚按、此章問答、其淺深高下、固不待辨說而明矣。然不切則磋無所施、不琢則磨無所措。故學者雖不可安於小成、而不求造道之極致、亦不可驚於虛遠、而不察切己之實病也。

第十六章

子曰、不患人之不己知、患不知人也。

孔子は言われた。「(自分の心の中で徳を実行さえすれば十分であり、他人がこのことを知るかどうかは他人の勝手だから、)他人は自分のことを知らない、こういうことを災いとしがないのだが、(自分が道理をよく知っているのであれば、自然にその人は賢者つまり才能があり善を行う人であるか否かを知るのであり、例えば、人の発言を理に適っているかどうか分析できれば、その発言の当人の内心状態が分かる。これが即ち「人を知る」ということだ。人を知ってはじめて賢者とは交友できるのであり、不肖者つまり才能がなく悪事を働く人を退けることができるのである。だから、)他人のことを知らない、こういうことを災いとするのだ。」

尹氏(前出)は言った。「君子とは自分自身に求める者であり、だから、他人が自分のことを知らない、こういうことは心配しない。他人のことを知らなければ、是かそれとも非か、邪まなのかそれともまともなのかを分別することができない。だから心配事となるのだ。」

尹氏曰、君子求在我者、故不患人之不己知。不知人、則是非邪正或不能辨、故以為患也。

付録:

冒頭の「概要」に挙げた諸論文に基づいて朱子哲学にいう「気」「理」「性」「徳」「道」「敬」「君子」の諸語の具体的な内容を、最後に付記する。

「気」については、「朱子にあっては、恐らく、気が三種類の存在様態で存在していると考えられていたのであろう。即ち、太極としての気、陰陽としての気、五行(質)として

の気、という三つの存在様態である。朱子のいう気は、実際は陰陽二気を指すと思われる。形而上的な存在である太極も気ではあるが、それが形而下的な存在としての陰陽二気と混同されるのを恐れて朱子は、太極は気だと言うのを、なるべく避けようとした。また、太極は気ではあるが、占める空間的な場がなく、直ちに陰陽二気になってしまうものだから、無形から有形へと変化するという過程において言えば、太極が先に存在するが、実際の生成順序においては、時間的な先後はない。」（「朱子の「太極」と「気」前掲、五七～八頁）とあり、「鬼神・神は、理ではなく、気的作用・働きを意味する概念である。これが鬼神・神の基本義であるが、気をも意味するのである。しかし、この気は、凝固しても形質を形成しない極めて清らかな気であって、凝固して五行（質）を構成する陰陽の気そのものではない（鬼神は、陰陽の気と五行の質を意味する場合もある）。」（「朱子の「神」前掲、一三六～七頁）とある。

「理」「性」「徳」については、「理は、人間の意図の如きものが全くない自然なるもの、本然の性（仁義礼智）または貧富・貴賤・死生・寿夭などといった運命的な規定、行為の準則や事物の扱い方や物の使い方、人間に内在する仁義礼智といった道德の徳目、事物に内在するそのどういう働きをするかを定めるものとしての機能・能力、事物の働きのあるべき様としての準則、といった内容を有する概念である。これらの内容が集まって一つの体系を構築しているのであるが、その体系の全体をも理と呼ばれるのである。」（「朱子の「理」前掲、四二頁）とあり、「仁義礼智信は、「五常の性」、つまり人間に内在する道德の徳目であると同時に、物の固有属性、つまり事物に内在するそのどういう働きをするかを定めるものとしての機能・能力でもある。「五常の性」と物の固有属性は、いずれも理であるので、「性即理」と言えることは否めないであろう。」（同上）とある。

「道」については、本稿の「學而第一」の十四章に「凡言道者、皆謂事物當然之理、人之所共由者也。（だいたい道というものは皆、事物の当然の理であり、人々の共通のよところのものを指すのである。）」とあり、これは即ち、仁義礼智、つまり道德の徳目及び事物の固有属性としての機能・能力であるが、特に、行為の準則や事物の扱い方や物の使い方を「道」とする、という意味である（「朱子の「理」前掲、三九頁）。

「君子」については、「君子は徳の実行を行う人の呼称である。端的に言えば、つまり、事物の理（つまり、人間は誰にも生まれながら仁義礼智の性が備わっているという道理、及び動植物や無生物の固有属性としての能力・機能）を究明し、そしてその理に従って言動を行う人のことを君子と呼ぶ、ということである。理を究明するその過程においては、常に、思慮を集中するという心的状態、及び牽強付会をしないという心構えを保つ。これが君子の特徴である。」（「朱子の「君子」前掲、(13) 頁）とある。（「常に、思慮を集中するという心的状態、及び牽強付会をしないという心構えを保つ」ことは即ち、「居敬」「持敬」「主敬」のことである。）